文藻外語學院
96年度教師專題研究發表暨研討會

論　文　集

主辦單位：教務處
時間：97年5月2日
地點：歐盟園區Q001、Q002

目　次

A Study of Good Language Learners in the Taiwanese EFL Context
.....卓惇慧、顏淑琴、郭雅惠　1
The Effect of MTI on L2 Proficiency and Learning Strategies
.....Yen,shu-chin、Chou,tun-whei　13
翻譯問題中的「是」與「似」研究-以「小王子 Le Petit Prince」為例
.....徐慧韻　31
Language Transfer in L3 Acquisition：the acquisition of
Spanish aspect
.....Hsien-jen chin　43
語言學習中，情境教材對初級學生文法整合能力影響之研究
.....胡惠雲　69
「会話の小クラス」の実施実態とカリキュラム編成に関する研究調査
.....張汝秀　89
由東漢盛世時期學風論儒家知識份子的地位與處境
.....王季香　107
談對外華語教學之文字學教學
.....陳智賢　127
限制式寫作於華語文作文教學之應用：以章法學為主
.....謝奇懿　147
兒童作文教學的設計理念與教學策略
.....林景蘇　167
情感與形式-金聖歎「分解說」的詩歌教學理念探析
.....廖淑慧　195
青女神話之流傳異變與原始面貌探論
.....林雪鈴　211
兩岸異中求同的契機-以兩岸對反分裂法事件的互動態度為例
.....林建宏　229
The Least Squares Finite Element Methods for the Steady-State
Oldroyd-B Viscoelastic Flow Problems
.....李雪甄　247
預先訂價協議之潛在問題
Potential Problems on the Advance Pricing Agreement Program
.....吳德華、衛忠欣　267

「会話の小クラス」の実施実態とカリキュラム編成に関する研究調査

張汝秀

日文藻外語學院日本語文系助理教授

要　　旨

激しい時代的・社会的な変化の中で、新しい社会的な要請や学習者のニーズなどに応えるため、日本語教育は従来と異なり、何かの新しいものを取り入れなければならない時代となった。したがって、本研究の目的は、社会的なニーズに即して、学習者のスピーキングを向上させるため、文藻外語学院日本語文系における会話授業への考察を通し、その特色及び 問題点を分析しながら、新しい日本語教授法およびカリキュラム内容を開発しようとするのである。

それを達成するために、本研究は 95 年度に導入された「小クラスの会話授業」の実況を比較・分析することによって、文藻外語学院日本語文系の会話授業への検討を通し 、学習者のコミュニケーション能力の向上および理想的な会話授業の編成を考案する。その研究方法として、本研究は「Action Research」という方法で進行し、文献分析以外に、アンケート調査、インタビューなどの研究方法を取る。そして、その調査結果は以下のようにまとめられる。

1. 口頭能力測定によい評価を得た人は、必ずしも日本語能力検定の高いレベルを取得した人とは限らない。また、口頭能力測定の結果から、学生の会話能力の貧弱さを呈していると言える。したがって、日本語能力検定と実際の会話能力とのギャップおよび、会話練習の機会を増やすという強い要望から学生が抱いている会話能力への不安感と会話授業への見直しの必要性を反映している。学生から堪能な会話能力の向上を期待している。
2. ロールプレイ中心と会話文暗記中心の授業形態によって、学生の会話能力に差がつけられる。会話能力を高めるために、教授方法の研究開発が必要とされる。

3. カリキュラムの再検討および会話授業への開発が要請される。社会的要請及び学生の要望によって、単なる会話授業の研究開発だけでなく、カリキュラム編成への再検討も必要とされる。

一・研究の目的と課題

本研究案の目的は、95 学年度に実施している小クラスの会話授業の実態への考察を通して、従来の日本語の会話授業のあり方を検討し、今後の日本語会話授業の教授法を開発しようとするものである。つまり、学習者のコミュニケーション能力を高めるため、日本語文系における会話授業の特色と問題点を分析しながら、新しい日本語会話の教授法およびカリキュラム内容を開発しようとするのである。

国際化、情報化が進んでいる現代社会の下で、近年、台湾と日本は経済面のみならず、文化的、学術的、政治的にも頻繁な交流が増えつつあるため、日本語に堪能な人材、特にコミュニケーション能力のある人材が強く求められるようになった。これを察して、多くの大学・管理学院・技術学院では応用日語学系や応用日語系などが続々と設けられた。このような日本語ブームの中で、日本語教育の量は確かに増加したが、それに相応する日本語教育の質の向上までは、まだかなりの落差があると言える。特に、コミュニケーション能力の欠如は周知の如くである[1]。

呉氏が指摘したように、「上級レベルの合格者が日本語の語彙、文法、文型、表現などを習得することによって相当な語学知識を積み上げ、聴解力を持っていても、その文法、読解力のレベルに等しい会話の運用力が身に付いている者はさほど多くない」[2]、という厳しい実態が現実である。そこで、堪能な日本語のコミュニケーション能力を持つ人材への育成には、いかなるカリキュラム内容及び教授法を取り組むべきかは、各学校の当面の重要な課題となる。

これに対し、文藻外語学院は他の大学と異なって、台湾で唯一の言語教育を中心に行い、専門的な外国語能力を持つ人材を育成するのが主なねらいである。その成果として、これまで送り出した卒業生は、各業界からかなり高い評価を受け、厚い信頼を得たという事実があった。したがって、新しい社会的要請の下で、いかなる対応策を取り、社会的要望に対応できるような語学人材を育成するかは、十分に注目に値すると思われる。

特に、95 年度から文藻外語学院は教育部から「卓越教学計画」の補助を得て、そのおかげで日本語文系は学生のコミュニケーション能力を一層高めようとするため、小クラスの会話授業を導入し始めた。日本語文系における会話授業は、いかなる有効な教授法や授業内容を行っているのかを検討する必要がある。したがって、文藻外語学院の日本語文系における会話授業の実施状況への研究調査を通して、より適切な会話授業のカリキュラム編成および教授法を見出すのが、本研究のねらいである。

---

[1] 鄭婷婷 「進んだ段階における会話教育―読解力指導を中心にして―」『中日文化』第 21 号 P.1

[2] 吳美嬅 「初級段階におけるコミュニケーション重視の会話指導法－談話内容の豊富性を中心に－」『二〇〇七年日語教學國際會議論文集』 東吳大學日本語文學系 P.125

二・調査の方法

1.調査対象

調査対象は文藻外語学院日本語文系の四技一、二年生である。本来は日本語文系の学生全体（五専部、四技、二技）を調査対象とする予定であるが、学校の LL 教室の使用率がかなり高いという状況下で、本研究案の能力測定に必要とされる設備は、E112 と E212 の LL 教室に限られるため、五専部、四技、二技の学生全体を一斉実施するのは、現実的に無理である。それ故に、今後の文藻の長期的な発展を考えながら、E112 と E212 の LL 教室の空いている時間帯に最も合わせるクラス四技の一、二年生（全部で 4 クラス）を調査対象と決めた。

四技の一、二学年は学力テストによって、A、B クラスの学生を A 組み（学力の高いほう）と B 組み（学力の低いほう）に分けられる。そして、子ども頃から既に日本に在住したことがある学生 2 名と日本人学生 2 名を除いて、この四クラスの学生は全部で 203 名である。そこで、図 1 に示すように、日本語能力検定の 1、2 級を取得した人数に関し、1 年生の場合に、1 級を取った人がまずいないというわけで、2 級を取った人は、A 組み 7 名、B 組み 1 名という差に対し、2 年生の場合に、A 組みは 1 級 4 名、2 級 21 名で、B 組みは 1 級 1 名、2 級 3 名という学力の差がついた。

2.調査期間・方法

本研究案の調査期間は 2007 年 2 月 1 日から 2007 年 12 月 31 日までである。しかし、9 月から学年の切り替えのため、実際の調査期間は 2007 年 2 月から 6 月までの一学期だけとなる。調査方法として、教師にはインタビューで、学生にはアンケート調査と 2 回の会話能力テストという方法で行う。その中、学生の会話能力を判定するため、口頭能力の測定は当然必要とされる。そのため、本研究案は一定の評価を得ている OPI（Oral Proficiency Interview)の測定理論を採用し、コンピューターを媒体とした口頭能力の測定を行うのである。

つまり、前もって録音した質問内容をコンピューターにより提示し、口頭能力測定を行い、測定終了後、録音した被験者の発話標本とそれを文字化した内容によって被験者の口頭能力を判定するというメディア方式である。初めてメディアに向かって発話するという被験者の心理的な要因を考慮したため、測定回数を 2 回に分けて行った。また、測定の信頼性を高めるため、初めての器械による口頭試問方式と関わる被験者の情意的側面および被験者の器械操作への熟練度（器械の故障も含める）などを配慮し、一回目の口頭能力測定を準備段階の練習として採取の標本から排除し、二回目の測定結果だけを採用する。また、被験者の情意的側面についてのフィードバックから得た知見を生かすため、2 回目の測定終了後、試験内容と会話授業などに関するアンケートを実施し、その場で回収する。

確かに、OPI の測定は面接者が受験者と直接対話するという形で実施されるものであるが、限られた時間内で大人数の口頭能力を直接測定することが不可能であるため、本研

究案はメディア方式の測定方式を採用することにした。そして、話し手の存在と関わる被験者の発話量などへの懸念に関しては、庄司恵雄等が、メディア方式と面接者が口頭で提示する口頭提示方式の試験の信頼性に関する研究論文では、「今回の実験の結果分析から、限定的な口頭能力であるが、二つの標本採取法を比較し、メディア方式による試験においても、有効な発話標本を採取することが可能であることが確認できた。」[3]という報告を発表した。したがって、本研究案は庄司恵雄等の研究結果によってメディア方式の測定方式を採用することにしたのである。

三・調査結果

1.日本語能力検定の測定結果と実際の会話能力とのギャップ

図２は「日本語能力検定の測定結果と実際の会話能力との差異関係」である。調査結果によれば、日本語能力検定の測定結果と自分の実際の会話能力に差があると感じる学生は85%も占めた。その中、60%の学生はかなりの差があると感じている。あまり感じていないのは僅か4%しかない。それは、ある意味で会話能力への測定が行われていない日本語能力検定の結果より、学生の実際の会話能力を判定することができないということを示している。

そして、図3に示したように、今後の授業内容に会話の練習をもっと増やすべきだと思う人は、80%以上にも達した。言い換えれば、授業中の会話練習がまだ充分でないことおよび、学習者の会話能力は聴解力、読解力、作文能力と比べれば、かなり弱いことが明らかである。したがって、社会のニーズおよび学生からの切々たる要望に応えるため、学生の会話能力をいかにして向上させるのかは、日本語文系の避けられない当面の問題であると同時に、言語教育界の重要な課題とも言えよう。

2.授業内容と会話能力との関連

最初に述べたように、学力テストによって、学生をA、B組みに分けられたため、学生全体の口頭能力測定の結果から見れば、一、二年生A、B組みの落差が依然として大きい。その中で初中～初上レベルに過半数を占めているのは、二年B組みの72%と一年B組みの90%であるため、二年B組みのレベル的な評価は4組みの中で最も低いという意外な結果が出た（図4をご参照ください）。確かに、口頭能力測定の質問内容は学年によって、難易度は異なるが、図５に示した二年B組みに対する「今学期実施した口頭能力測定内容の難易度」の調査から見れば、普通だと感じる人は半分以上（53%）を占めたため、測定の質問内容に問題があるのではなく、自分の話したいことをうまく話せないという学生の会話能力に問題があると言える。

また、日本語能力検定の取得人数とレベルから見れば、二年B組みのほうは一年B組

[3]庄司恵雄等　「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」　『日本語教育116号』　日本語教育学会　2004.7　P.117

みよりだいぶ上のほうなのに、口頭能力測定の結果は反って逆となった。それは、日本語能力検定の結果は会話能力のレベル的な評価には反映することができないということを示した。その一方、こうした結果から、二年B組みの学生の会話能力がなかなか伸びない原因としては、60%も占めた中間、期末テストの筆記試験というシラバスの設計から、会話練習の重要性が看過されるという問題にあると考えられる。

一方、口頭能力測定の結果では一年A、B組みのレベル的な評価は、日本語能力検定の結果ほど落差が開いていないが、一年B組みの口頭能力測定の結果は二年B組みよりもレベル的に上だという実態から、一年B組みの学生の会話能力が前より伸びているということが考えられる。その原因を究明するため、教師へのインタビューから会話授業の進行状況を検討することにした。そして、表1に示したように、一年A、B組の授業進行は、大体文型練習→会話文暗記→（ロールプレイ）という順序の授業形態で行っていたが、その中で最も異なっているのは、ロールプレイ中心（B組み）と会話文暗記中心（A組み）というところだけであろう。しかし、こうした相違点だけで、学生の会話能力に影響を与えるのかは、十分吟味する必要があると思われる。

表１　一、二年生A、B組の授業進行内容

教師	教科書	授業進行形態（1hr）	授業進行形態（2hr）	中間、期末テスト
台湾人教師一年A組	新文化日本語初級4	聴解中心	文型練習、会話文暗記、ロールプレイ（2、3回）発音、文法重視	筆記試験
日本人教師一年A組			発音、文型練習	口頭試問
台湾人教師一年B組	みんなの日本語初級Ⅰ	聴解中心	文型練習、会話文暗記、ロールプレイ（毎回）ロールプレイ重視	筆記試験
日本人教師一年B組			ペアワークを中心に文型の応用練習、ペアで発表	ロールプレイ

3.進路と会話力の関係

グローバル化時代の到来によって、異文化間のコミュニケーションが一層強調され、コミュニケーションの運用能力がますます重視されるようになった。これに関する意識調査は、アンケート調査の第四項目である「四技能の中で今後の進学または就職に最も重要だと思うのはどれか」（図６）から、会話力57%、聴解力22%、読解力10%、作文能力8%、意見なし３%という結果を示し、会話力の重要性を感じる人は圧倒的に多いのが明らかである。そして、第五項目の「会話授業で口頭練習をもっと増やすべきである」（図７）では口頭練習をふやすべきだと思う人は81%（強く思う人は28%）も占めた。

こうした結果は新しい時代のニーズに対応するためにコミュニケーション能力への重要視を示した一方、ある意味では現行の会話授業で学生を話させる口頭練習の機会はまだ足りないと言える。これは会話授業の内容編成に再検討する必要があるのか、それとも限られた時間で学生の人数に問題があるのか、検討の余地がある。

一方、第九項目の「学校のカリキュラム編成に最も力を入れるべきなのは、どれか（複選択）」（図 8）では、会話力は５１％、聴解力は 25%、読解力は 10%、作文能力は 12%、意見なしは 2%というような結果を示した。これは、学校のカリキュラム編成における会話能力の育成と関連のある科目をもっと取り入れるという学生たちの切々たる要望が見られる一方、彼らの会話能力への不安感も現していると言える。そこで、社会的な要請に応えるために会話授業への開発・再検討は極めて必要である。

一方、将来の進路に関するアンケートでは、まだ決めていないのは 42%、進学は 31%、就職は 27%（図９）となっている。ところで、従来、文藻外語学院は就職向けの学校なので、アンケートの結果から就職志望よりも進学志望のほうが多いということから、近年、大学の学校数の増加によって、学生の進路志望が変化してきたため、これをいかに対応すべきかが、今後の学校のカリキュラム編成に重要な課題となる。

四・考察

以上の調査結果から次のようにまとめられる。

1. 口頭能力測定によい評価を得た人は、必ずしも日本語能力検定の高いレベルを取得した人とは限らない。また、口頭能力測定の結果から、学生の会話能力の貧弱さを呈していると言える。したがって、日本語能力検定と実際の会話能力とのギャップおよび、会話練習の機会を増やすという強い要望から学生が抱いている会話能力への不安感と会話授業への見直しの必要性を反映している。学生から堪能な会話能力の向上を期待している。
2. ロールプレイ中心と会話文暗記中心の授業形態によって、学生の会話能力に差がつけられる。会話能力を高めるために、教授方法の研究開発が必要とされる。
3. カリキュラムの再検討および会話授業への開発が要請される。社会的要請及び学生の要望によって、単なる会話授業の研究開発だけでなく、カリキュラム編成への再検討も必要とされる。

(一) 会話能力への不安感の背景

聴解力、読解力、作文能力と比較した場合、学生の会話能力のほうが乏しいのは、アンケートによって分かった。これは文藻日本語文系の学生だけの問題ではなく、吳美嬅氏が述べたように、「実際の学習成果から四技能の習得程度を見ると、初、中、上級のいずれの段階にしても学習者の[会話]力は[聴解]、[読解]と[作文]能力と比較した場合、弱化しているのは一般的傾向である。」[4]それは、コミュニケーションの即時性、対応性などの

[4]吳美嬅 「初級段階におけるコミュニケーション重視の会話指導法－談話内容の豊富性を中心に

乗り越えなければならない問題があるからである。

つまり、会話というものは、話し手と聞き手の両方が相手の反応によって作り上げていくものであるため、相づち、応答、話順取りなどの即時性、対応性が要求されるものである。したがって、これらの問題をいかにして解決・開発するかが、言語教育の当面の重要な課題である。一方、今後の日本語能力検定に口頭試問の項目を増設すれば、会話能力の向上により効果的だと考えられる。

（二） 授業形態と学習効果

吳美嬅氏の研究では、「学習時間が経つにつれて、会話力とほかの三技能との差がいっそう大きくなるのも教師として観察してきたものである。」[5]という研究報告がある。これに対し、本研究案の口頭能力テストでは、一年A、B組みの入学時の学力テストにしても、日本語能力検定の結果にしても、両組みのレベル的な落差がかなり大きいというものの、不思議なのは口頭能力測定の結果ではその差が却って縮んだ。更に、一年B組みの測定結果は二年B組みよりもレベルが高い。これは、ご周知のように、教師の取り組んでいる授業内容・形態の相違によって、学習者の学習効果も違ってくるため、教師の教育理念と授業計画に原因があると考えられる。

一年A、B組みは最初から学力テストによって、日本語のレベルはだいぶ異なっているため、教材の内容はもちろん違った。そして、授業の進行形態は、ほぼ文型練習→会話文暗記（→ロールプレイ）という形で進んでいたが、A 組みの場合は学生の発音、文法の正しさを重視するため、文型練習、会話文の暗記を中心としているのに対し、B 組みの場合は学生の会話練習を重視するため、ロールプレイの練習を中心としているのである。この両組みの授業形態はいわゆる、オーディオ・リンガル・アプローチ（A 組み）とコミュニカティブ・アプローチ（B組み）の教授法に類似しているものだと言える。

オーディオ・リンガル・アプローチは言語の構造、音声、語彙の習得を重視し、文型の学習を通して、言語能力の獲得を目的とするのに対し、コミュニカティブ・アプローチはコミュニケーション能力の練習を通して、コミュニケーション能力の獲得を目的とするのである。したがって、A 組みよりも B 組みのほうが会話練習の回数がだいぶ多いのが考えられる。そして、口頭能力測定の結果では、A、 B 組みの差が縮まったのも無理ではないと考えられる。

一方、一年A、 B組みの中間･期末テストは日本人教師以外、全部筆記試験となっている。それに、二年B組みも同様である。これは口頭能力のテストよりも筆記試験のほうが基準性があるからという配慮であろうと考えられる。それは、既に台湾の日本語教育に定着している「書き言葉から話し言葉への転換」という学習スタイルによい説明を与えた。つまり、授業内容やその進み方は学習者の学習スタイルや学習効果に大きな影響を与える。

－」『二〇〇七年日語教學國際會議論文集』 東吳大學日本語文學系　P.125

[5] 同上　P.125

（三）カリキュラム編成への再検討

近年、多くの大学・管理学院・技術学院が続々と設立したため、大卒の教育量はだいぶ増えた。しかし、これらの大卒者は、企業界に求められる人材とのギャップがかなり大きい。それを埋めるため、企業界はより高い段階の大学院卒の人材を求めるようになったのが、近年の傾向となった。こうした状況下で、大学・大学院への進学は一般化とされている。そして、今回のアンケートでは進学志望は就職志望より多い。また、日本語文系から高学年向けの調査（図 10 をご参照）でも、就職志望（42%）よりも進学志望（58%）のほうがだいぶ多い。このような趨勢に応じるため、従来、就職向けの文藻外語学院、特に日本語文系のカリキュラムへの再検討は極めて必要である。

五・まとめ

会話活動を通して日本人と意思疎通を果たすのが多くの日本語学習者の望みだと言える。そして、言語学習では、コミュニケーションの重要な手段としての会話能力が、最も言語的な達成感を学習者に与えるものであると同時に、最も多くの挫折感を学習者に与えるものとも言える。したがって、これまでの会話授業に関する関する様々な教授法や学習法などの研究論文が多く発表された。しかし、これらの研究・発表はほとんど「書き言葉から話し言葉への転換」という教授形態でアプローチするものである。しかし、コミュニケーションは即時性、対応性が求められるため、「書き言葉から話し言葉への転換」という学習形態はなかなかそれを対応することができない。

今回の文藻外語学院日本語文系への調査結果では会話の授業内容は依然として「書き言葉から話し言葉への転換」という形態にとどまっている。それに、3 組みの会話授業における中間･期末テストは全部筆記試験を採用することが、学生の会話能力を向上させるという会話授業の教科目標に反するものだと言える。確かに、筆記試験は口頭試問よりも採点の公平性・基準性があり、また学生にある程度の安心感を与えることができるということから、確かに利点がある。しかし、画一性、暗記中心の学習スタイルは会話に必要とされる即時性・対応性に対応することができない。それに、これまで既に定着している「書き言葉から話し言葉への転換」という会話の学習スタイルと変わらず、伝達能力を重視してきた文藻の会話授業の一つの特徴であり、問題である。

一方、上述したように、教師の教え方によって、学習者の学習効果も違ってくるということが、今回の一年 A、 B 組みの口頭能力測定で明らかになった。そして、会話の学習効果に関し、オーディオ・リンガル・アプローチに類似している一年 B 組みの教授法は、コミュニカティブ・アプローチに類似している一年 A 組みの教授法より効果的であることも今回の研究調査で分かった。

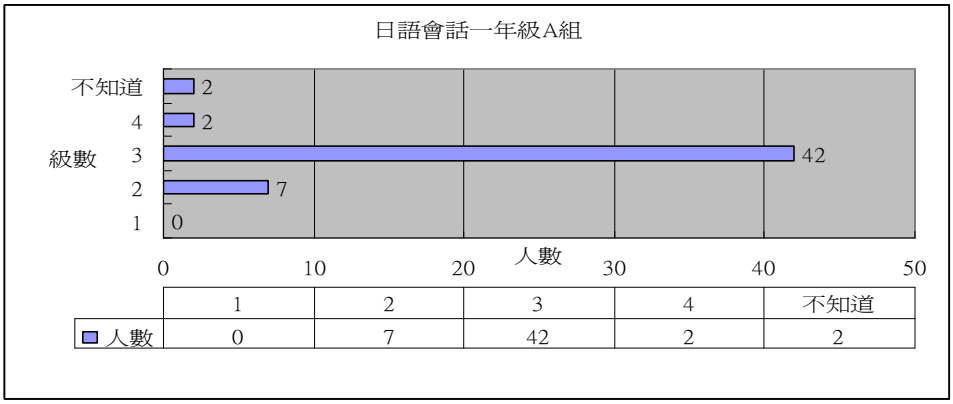
グローバル化時代の到来によって、現代社会の国際化、情報化がますます進んでいる中、企業界からの要請も学生の進路志望も変わってきたため、現行のカリキュラムの再編成が必要とされる。それに、学習者の日本語のコミュニケーション運用能力を高める

ために、これまでの教授・学習スタイルを変えて、それを話し言葉からアプローチするという新しい会話授業のコースデザインおよび日本語会話の教授法を開発する必要がある。

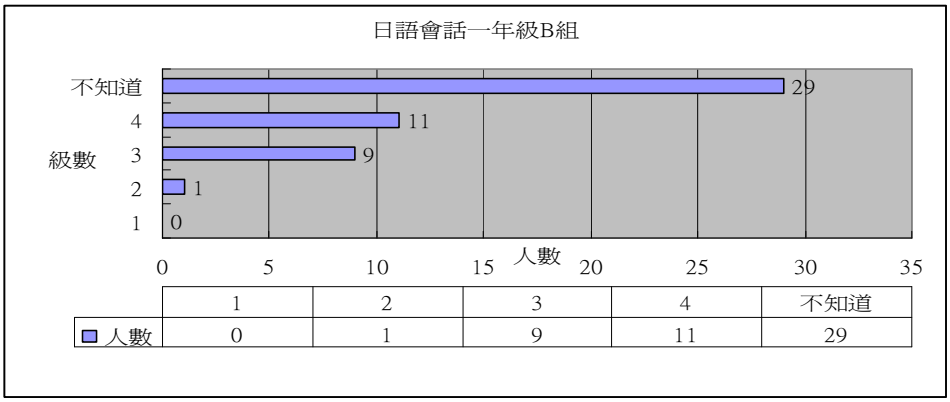
これは、即ち、通訳の理論や技法を日本語会話の授業内容の一環として導入し、従来の会話授業への革新を遂行しようとする新しい研究開発が考えられるが、これに関する研究調査は、次回の計画案に譲ることにした。したがって、文藻外語学院の日本語文系における会話授業は、いかなる対応策を取り、社会的要望に対応できるような語学人材を育成するかは十分に注目に値すると思われる。

参考文献

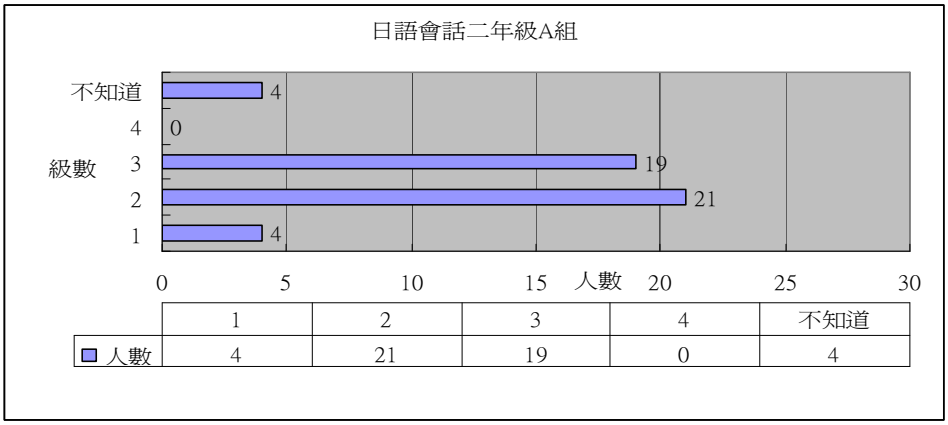
1. 庄司恵雄・青山真子・伊東祐郎・迫田久美子・野口裕之・春原憲一郎・広利正代　「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」　『日本語教育 116 号』　日本語教育学会　2004.7
2. 鄭婷婷　「進んだ段階における会話教育―読解力指導を中心にして―」『中日文化』第 21 号
3. 吳美嬅　「初級段階におけるコミュニケーション重視の会話指導法－談話内容の豊富性を中心に－」『二〇〇七年日語教學國際會議論文集』 東吳大學日本語文學系
4. 牧野成一ほか　『ACTFL-OPI 入門』アルク
5. 新井芳子（2001)『台湾人日本語学習者のコミュニケーション能力の向上に関する一考察―その技法と可能性について―』東呉大学日本語文学系碩士班卒業論文
6. 鄭婷婷　「進んだ段階における会話教育―読解力指導を中心にして―」『中日文化』第 21 号　2002
7. 孫寅華　「大学に日文系における会話授業の問題点及び改善にあたって」『銘伝日本語教育』　2001
8. 賴錦雀　「有關大學日語系會話教學之我見」『銘伝日本語教育』　2001
9. 高見澤孟　『新・はじめての日本語教育 2』　アルク　2007
10. 田中望　『日本語教育の方法―コースデザインの実際―』　大修館書店
11. 泉子・K・メイナード　『談話分析の可能性』　くろしお出版
12. 小島総子　『日本語の教え方』　アルク
13. 木村宗男　『日本語教授法』　おうふう



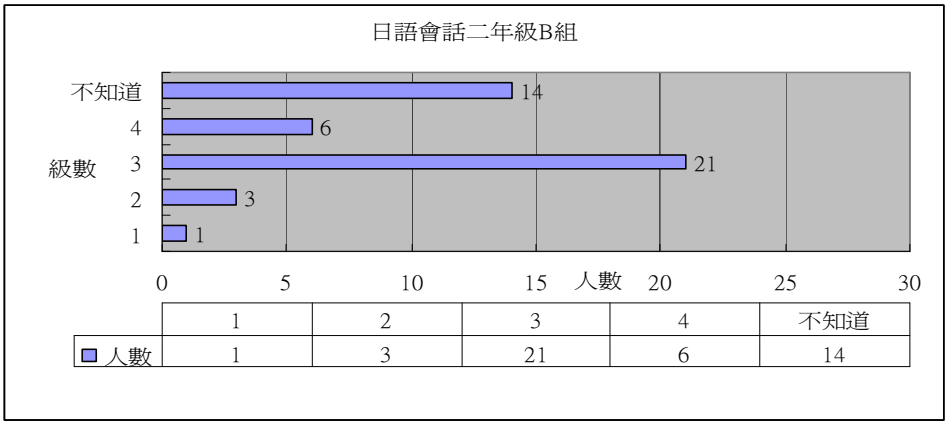
	1	2	3	4	不知道
人數	0	7	42	2	2



	1	2	3	4	不知道
人數	0	1	9	11	29



	1	2	3	4	不知道
人數	4	21	19	0	4



	1	2	3	4	不知道
人數	1	3	21	6	14

図１・日本語能力検定取得の実態

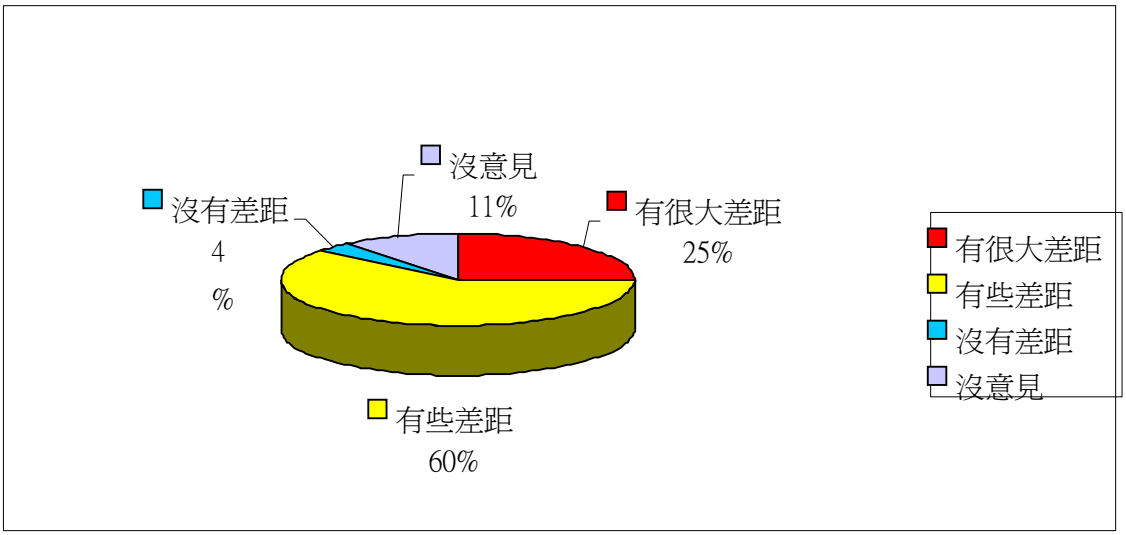


図２.日本語能力検定の測定結果と実際の会話能力との差異関係

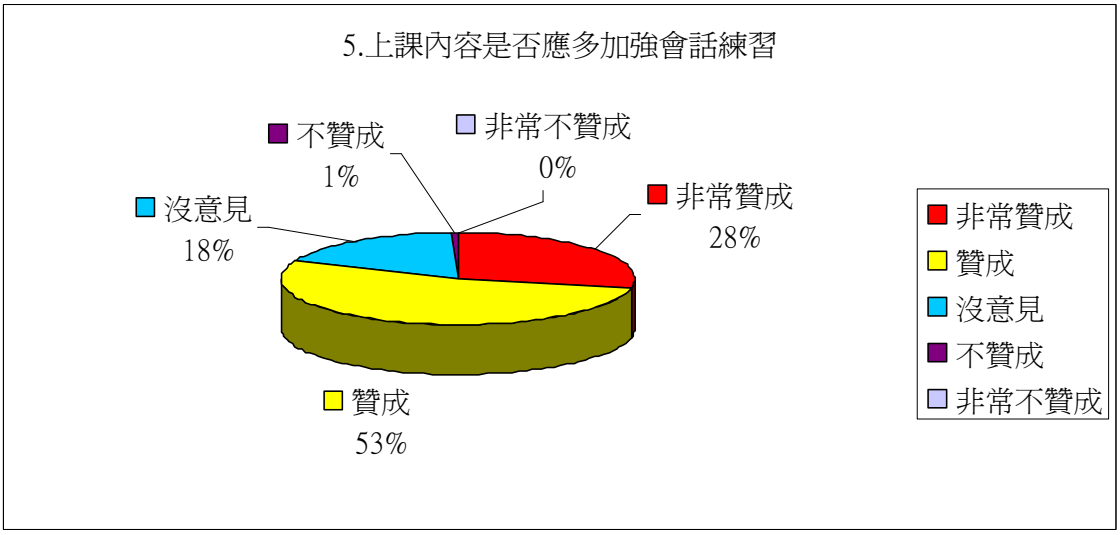
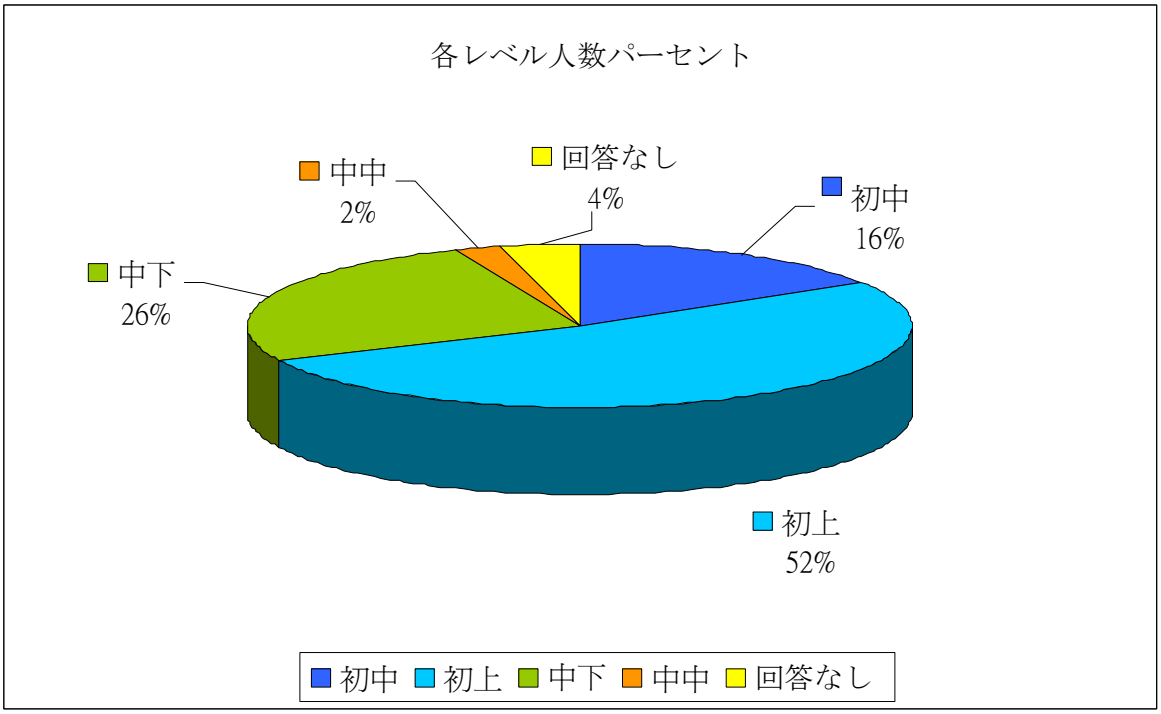
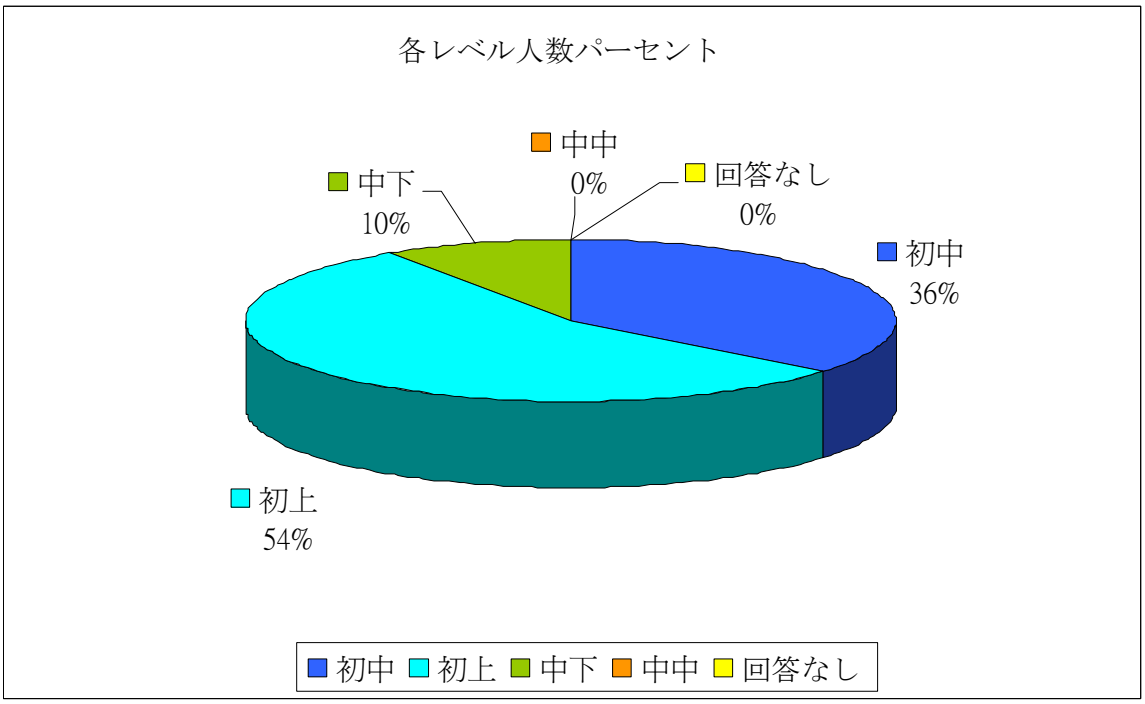


図３・今後の会話授業に口頭練習の機会を増やすべきか

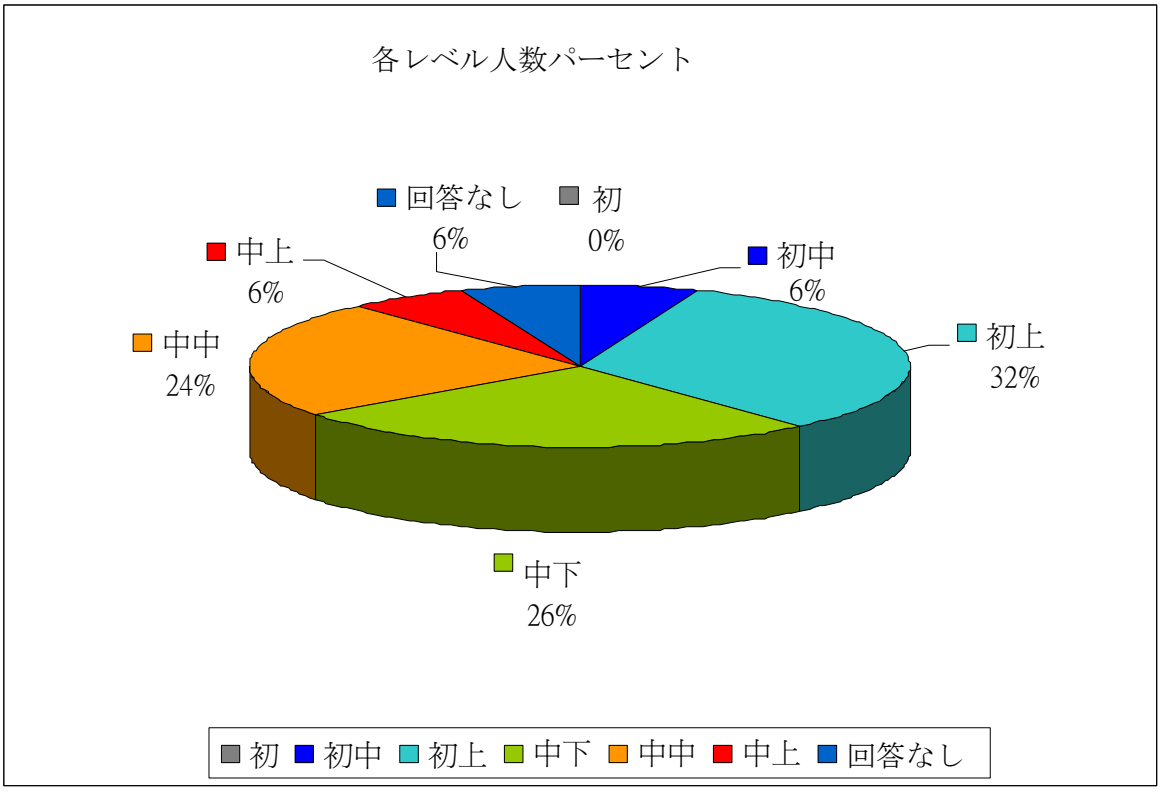
一年生 A 組の口頭能力測定の結果



一年生 B 組の口頭能力測定の結果



二年Ａ組の口頭能力測定の結果



二年生Ｂ組の口頭能力測定の結果

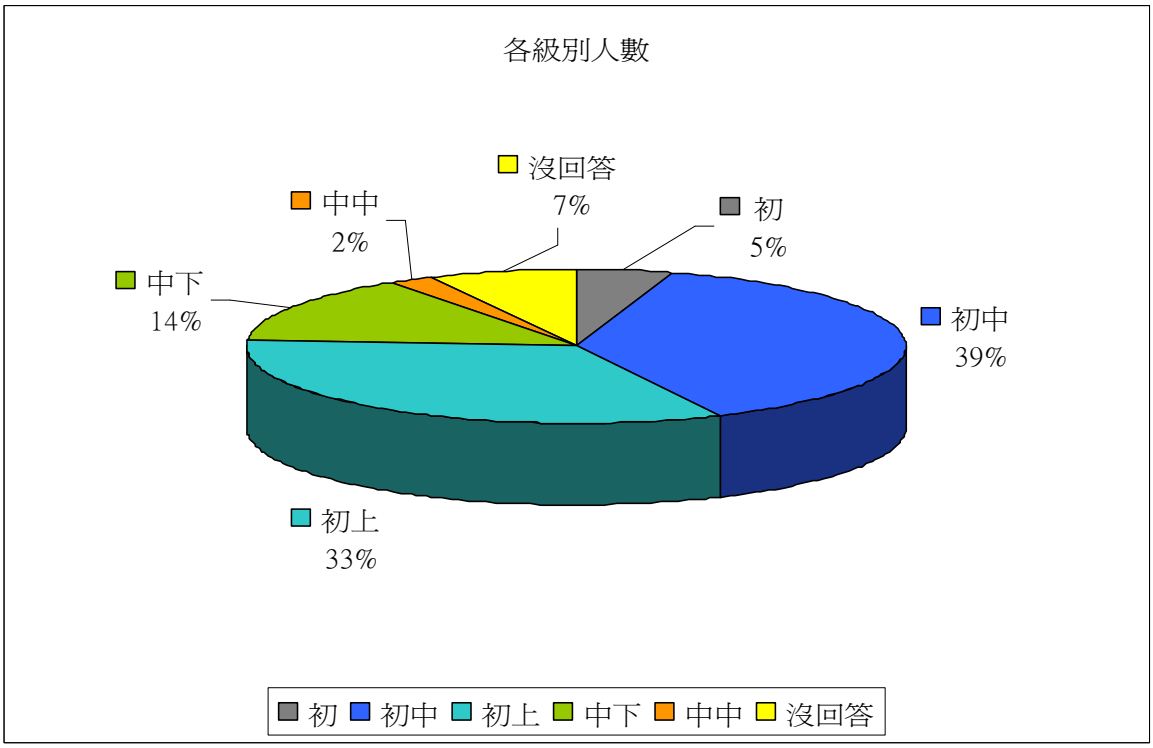


図４・一、二年生Ａ、Ｂ組の口頭能力測定の結果

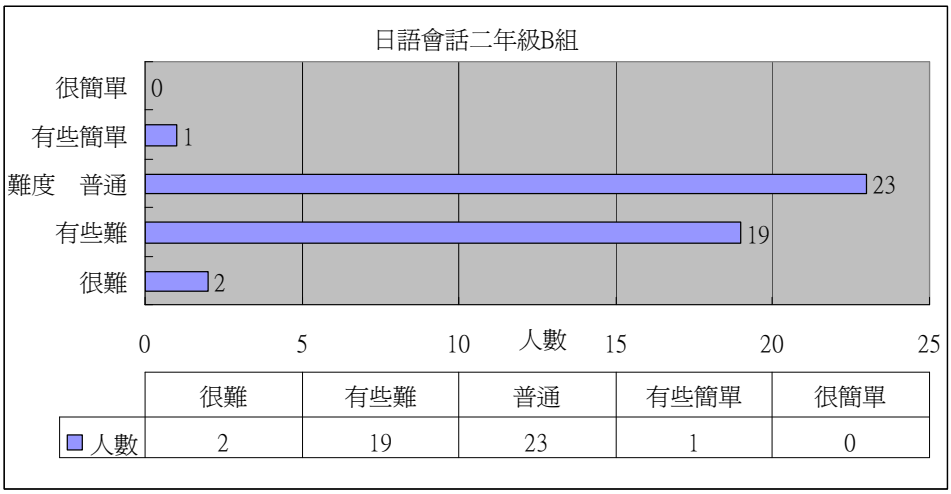


図５・今学期実施した口頭能力測定内容の難易度

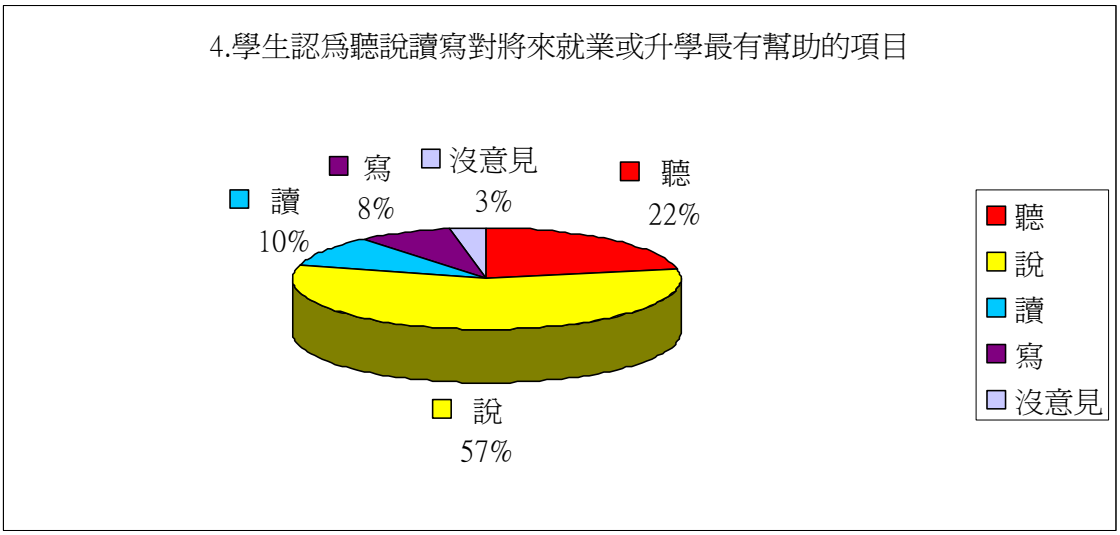


図６・四技能の中で今後の進学または就職に最も重要だと思うのはどれか

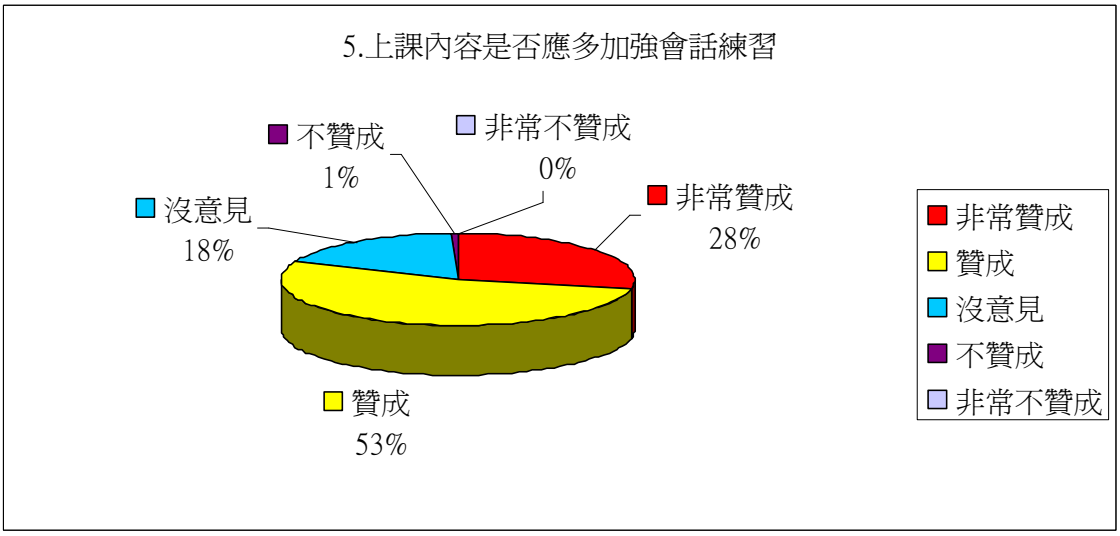


図７・会話授業で口頭練習をもっと増やすべきである

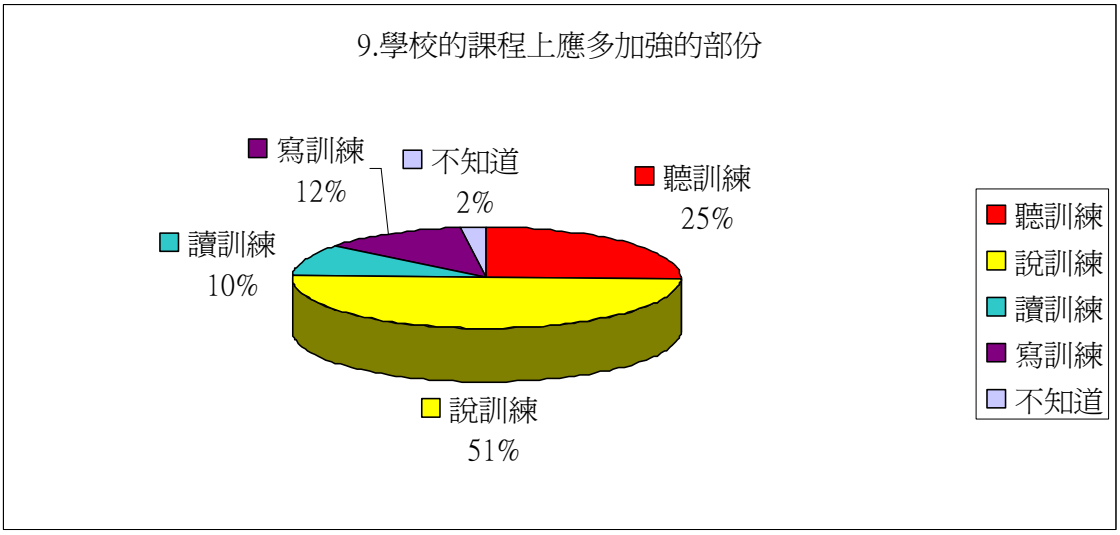


図８・学校のカリキュラム編成に最も力を入れるべきなのは、どれか

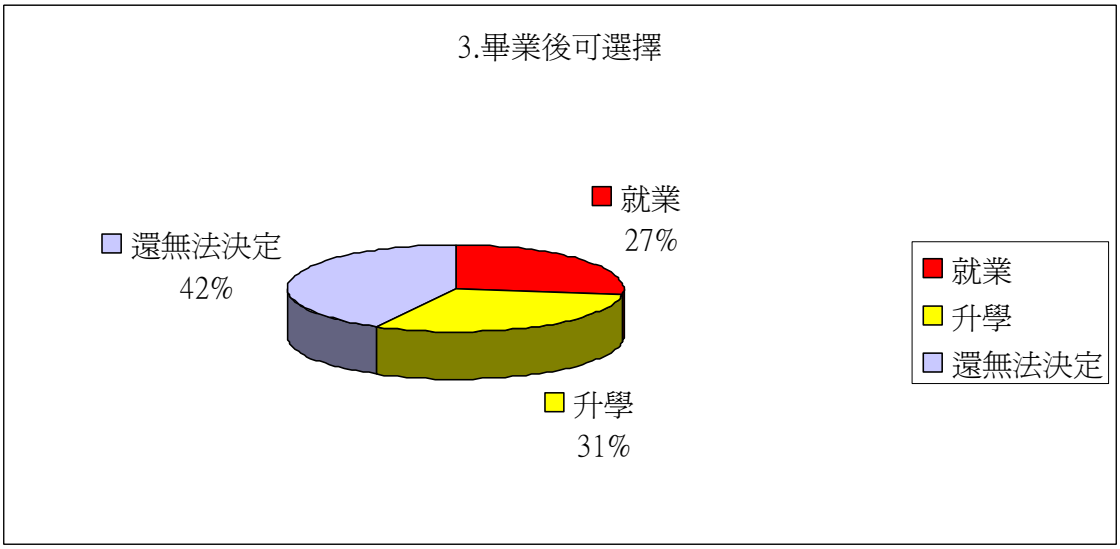


図 9・将来の進路に関する調査

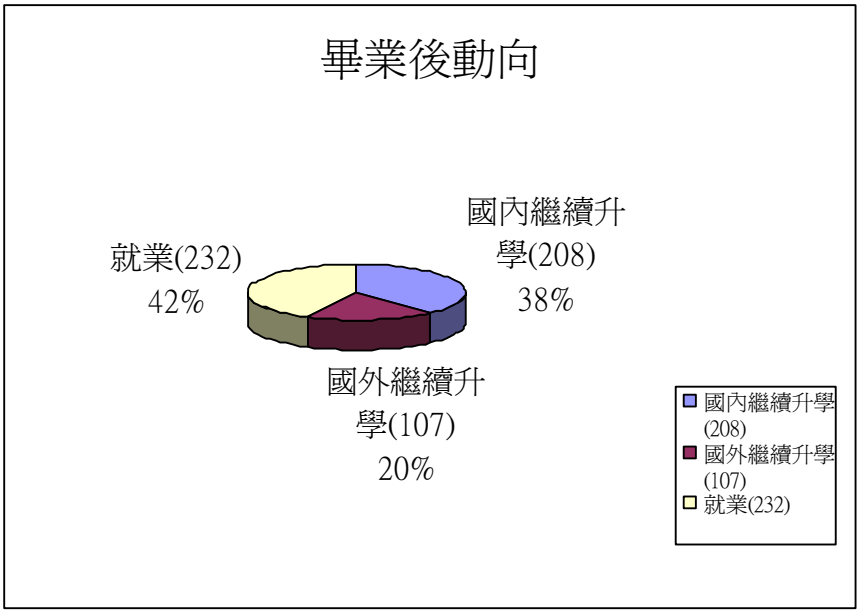


図 10・日本語文系高学年全体の進路傾向